大学と地域連携
－尾鷲組大庄屋文書調査のその後－

塚本　明

はじめに

2002年９月に始まった尾鷲組大庄屋文書の調査は、その後毎年３月と９月の集中調査が定例化し、今年３月の調査は第６回目となる。大学と市民グループとの共同作業も軌道に乗り、調査自体は順調に進んでいる。本誌３号(2003年３月）「尾鷲大庄屋文書調査始まる－地域文化運動としての古文書調査の試み－」で報告したように、最初の年度にはどこからも財政支援を得られず、学生・市民とも全くの手弁当のボランティア調査となった。貧しくとも、人々の善意と心意気に支えられた調査の楽しさを、私は忘れない。だが文書の保存の手立ては全く立てられず、また学生たちには小さくない経済的負担を強いることとなってしまった。

翌2003年度にこの事業は、三重大学が文部科学省から認められた「地域貢献特別支援事業」のなかに位置付けられ、700万円余の補助金がおりることとなった。状況は一変し、文書の撮影作業や講演会・講座の開催、関係する文献のデータベース作成など、その活用に向けての取り組みに追われることになる。計画通り実施すれば、地域の文化活動の振興に大学として本格的に寄与することができると考え、大いなるやりがいを感じつつ取り組んでいた。

この補助金は２年間交付される筈であった。ところが、国立大学が独立行政法人に移行するに伴い、2004年３月末に突如、文科省から一方的に打ち切りが通告されたのである。名目を変えた補助金から前年度の３分の２ほどは何とか手立てがなされたが、三重大学当局からは、最低限の「形作りの」事業に留めるように、との申し渡しがなされた。

一方、熊野古道を世界遺産として登録する動きのなか（2004年６月に正式登録）、三重県の事業として尾鷲市の向井地区に「熊野古道センター」（仮称）を建設する計画が進められた。江戸時代の熊野街道を往来した人々の様子や、街道沿いの生業と暮らし等が詳細に分かる尾鷲組大庄屋文書もそのなかで注目され、私も関係する仕事をいくつか引き受けることになった。行きがかり上、「古道センター」の構想にも関与していくこととなる。

初年度とはうって変わって、外的要因に振り回され続けた２年間である。この間、大学は地域社会とどう関わるのが良いのか、学問を通した地域社会との関係はどのように構築するべきなのかを、常に我が身に問い続けてきた。文科省、三重大学当局、行政、地域社会のそれぞれが、どのような姿勢で、いかなる思いを持ってこうした問題に取り組んできたのかも、その範囲で見えてきた。

本稿は、文科省の「地域貢献特別支援事業」とは何であったのか、国立大学の独立行政法人化はどんな影響を及ぼしたのか、その転換のなかで三重大学当局はいかなる判断を下したのか、こうしたことを、この時期に起こった「事件」の資料として残し、同時にこの２年間に尾鷲地域で展開した事業の自己検証を通して、大学と地域連携のあり方、とりわけ歴史学を通した活動はどうあるべきなのかを考えるものである。

１、地域貢献特別支援事業に採択

本誌３号が刊行されて間もない2003年３月下旬の第２回調査は、川端家の御事情で天満浦にある民宿「海の家」に宿をとり実施することになった。もちろん補助金はないために一切が自己負担であるが、三重県史編さん室の皆さんや社会人からのカンパで、学生の出費は多少抑えることができた。

天満浦に隣接する水地浦という集落がある。歴史的には尾鷲で最も早く人が移り住んだ「本貫の地」とも言われ、慶長6(1601)年には村高44石、家数も25を数えるのだが、漁業権を持たず、猪・鹿の被害が激しかったために江戸時代中に衰退し、現在は誰も住んでいない。水地浦の困窮を伝える文書は、「大庄屋文書」にも多い。朝の散歩がてら、学生たちと何度かここを訪ねた。山仕事をしておられた方に話を聞くと、オイルショック前には10軒くらい家があり、５、６年前までは居住者がいた。観光開発を目指して業者が山地を購入したが、凍結状態であるという。

廃墟となった建物がいくつかあるだけの空間は、思いのほか狭く感じられる。44石の田畑があったとは想像もつかない。平地のほとんどないところを開墾した人々の苦労が偲ばれた。猪・鹿除けのネットが張られた植木栽培以外、人が関与している形跡は薄い。切り立った海際の道を学生たちと歩きながら、海と陸との地形関係と水地浦が漁業権を持たなかったこととの関係などを話した。当たり前のことだが、現地に赴かなければ気が付かないことがある。第３回以降の調査でも、馬越峠に至る熊野古道を歩いたり、難船事件の多い早田浦や、江戸時代以来尾鷲の町なかとは海で結ばれた須賀利浦を巡航船に乗って訪ねたりした。

この時の調査では、第１回に比べて作業進行を急がず、内容を楽しみながら行いたい旨を皆さんに告げた。そして調査終了時に、各自に興味を持った文書内容についての紹介と感想を述べて貰った。航海や商売、婚姻、参詣等で諸国とこの地とを行き来した人々に関する文書が、関心を集めていた。「尾鷲古文書の会」会長の野田敦美さんからは学生に向けて、是非尾鷲で卒論に取り組んで欲しい、そして尾鷲に就職して欲しい、そうしたら婿さんを用意する（！）、との発言があった。就職・結婚はともかく、卒論に関してはその後、見事に実現しつつある。この時に全くの初心者として参加した２年生はこの春卒業するが、そのうち３人が尾鷲組大庄屋文書をふんだんに用いて、質の高い卒業論文をまとめることとなる。

この時も塚本は、調査の成果報告会として講演を行い、尾鷲と外の世界との関係をまとめた。また調書（カード）の質が高まり調査の水準が上がったこと、調査体制として全国に先駆けたものにしていきたい旨を述べた。

メンバーは入れ替わりつつあったが、この時もすこぶる和気藹々と、楽しい調査であった。民宿のおかみさんからは「こんなしっかりした学生さんたちを連れて歩くのは自慢でしょう」などと言われた。商売上手のお追従かと思ったが、「私も、いろんなお客さんを見てるからねえ」とつぶやくように言われたから、案外本心の言葉かもしれない。もちろん悪い気はしないものである。社会人と一緒に地域で活動することは、学生の社会性を育てることにもなるのだろう。

調査終了と前後して新年度の資金の手立てを検討し始めた。学長裁量経費に今回も応募することを考えていたが、３月末に地域共同研究センター（当時。現・創造開発研究センター）の菅原洋一先生から、三重大が県下自治体と連携して文科省の補助事業に申請する計画があり、尾鷲事業をその１プロジェクトに位置付けるため、これまでの作業の概略と、新聞等に報道された資料などを調えるようにとの指示があった。菅原先生はこの間、尾鷲調査の財政的厳しさを御心配下さっていた。地元新聞の記事は尾鷲市役所の高芝芳裕さん（企画課課長・当時）にお願いし、ＦＡＸで送って頂いた。だが、補助金申請額は大きなもので、正直なところあまりアテにする気分でもなかった。貧乏性は染みついてしまうものである。

ところがそれから２か月ほどが経った６月５日のこと、菅原先生から「地域貢献特別支援事業」として採択された旨の内々の連絡を頂いた。まだ半信半疑だったが、翌６日に研究協力課から正式に通知があった。全体の事業名は「美し国、三重のくにづくり～持続可能な魅力ある地域づくりを目指して～」、補助金の総額は6000万円とのことである。この間、研究ＣＯＥを始め大型企画で落選続きの三重大にとって久々の朗報であり、企画立案に尽力された菅原先生の大きな功績と言うべきであろう。

尾鷲事業は全８事業のうちの１つ「東紀州の文化的遺産の掘り起こしと活用」プロジェクトとして位置付けられ、この年度で733万円が手立てされた。尾鷲を舞台に大学と地域連携の実質化を進めよとの御下命と受け止め、身が引き締まる思いであった。

とまれ、数万のお金にも事欠いていた前年度から状況は一変した。あまりの落差になかなかピンとこなかったが、最初の調査時に「講演料」として費用を捻出して下さった川端守さんに御報告するべく、翌７日の土曜日に車を走らせ尾鷲に向かった。残念ながら川端さんは不在だったが、帰宅後に電話で、「わらしべ長者のようですな」などと話し、喜びを分かち合ったものである。

何よりありがたいのは、これで尾鷲組大庄屋文書の撮影が進むことである。尾鷲市立中央公民館・郷土資料室において大事に保管されているとはいえ、万が一の災害で消滅してしまえば取り返しがつかない。江戸時代の尾鷲のみでなく、そこを起点にした紀伊半島の歴史、諸国からの熊野信仰の歴史、上方と江戸を結ぶ海運の歴史、漁業と林業の歴史、それらをあますところなく伝える、そして数百年に亘って保存されてきた、大事な文書である。「現物」の価値はどんなに強調してもし過ぎることはないが、しかし文書はあくまで文字史料である。写真さえ撮っておけば、基本的な文字情報は永く後世に伝えることが可能だ。膨大な尾鷲組大庄屋文書のうち、まずは過去に伊藤良氏らにより整理された冊子分について、撮影を進めることにした。

撮影は費用面を考慮してデジタルカメラで行うことにし、画像の調整・紙焼きも含めて地元でパソコン教室を開かれている北村孔司氏に委託した。プライド高く職人肌の北村さんとは、当初は作業の進め方をめぐり衝突もあったが、最終的にはこちらの要請以上のレベルで、やり通して頂いた。以前に三重県史編さん室で撮影していた約４万コマの分を含めて、冊子分全部で約25万コマ分の撮影及び紙焼き複写作業が２年間で完了した。製本はまだ一部に留まるが、これを全部並べれば本棚が６～７本必要な分量となる。

土地台帳類には大量で細かな付箋や貼紙があるなど、写真では記録できなかった情報も少な

くはない。だがともかくも冊子分については、史料の主要な価値は保存する手立てが出来た。また紙焼き・製本が整えば、原文書に比べて出納が簡便なため、より一層の活用を計ることができよう。この成果に、私はかなり満足している。

古文書の撮影に多額の公金を割くことは、通常なかなか理解されない。三重県内の古文書の調査・保存事業に中核的役割を担っている三重県史編さん室でも、予算は極めて限られている。今回の「地域貢献特別支援事業」での予算化は、その意味で絶好のチャンスであった。補助金の使途として、交通費や宿泊費等の実費や調査器具代等は支出するものの、私が講座で出張する時も含めて日当・謝金は計上せず、余裕のある分は全て撮影関係費に注ぎ込んだのはそのためである。撮影から紙焼き・製本まで１コマでほぼ30円強ほどの単価で済んだ。こうした作業をしたことのある人は理解されようが、コストパフォーマンスは極めて高い。ひとつには全部を業者委託にせず、直轄で作業を行ったからである。学芸員の田崎通雅氏の協力を得つつ、技術的チェックや荷物の運搬などに頻繁に尾鷲に通った。そして、北村さんを始め委託した業者と約束を交わした際、２年間の計画で作業の総量を見積もり、分量の多さから単価をかなり安く抑えて頂いたことが大きい。だが、そのことが厳しい縛りとなって、後に金策に苦しむこととなる。

さて、古文書の撮影・保存作業は勿論、たとえ調査を市民グループと一緒に行っていても、それだけの活動では広がりを持たない。地域の文化財は、住民一般の感覚とかけ離れたところでは十分に守られない。古文書には何が書かれているのか、それを調べることにはどんな魅力があるのか、尾鷲や熊野古道はどのように記されるのか。そうした点を一般向けに分かりやすく知らせ、価値を理解して貰うことが、地域に残る古文書を守るためには何より大切である。勿論、面白おかしく伝えるだけでは駄目だ。様々な意識の人々にそれぞれのレベルで理解頂けるよう、いくつかの企画を考えた。

まず、調査時には毎回３日目に、一般にも公開した「調査成果報告会」を開催した。これは、第１回目に調査費の捻出のため、川端守さんの提案（通告？）により始めたことである。複写物を用いた古文書の講演会よりも、現文書を目の前にした説明は、ずっと身近なものと受け止められるはずだ。ただし一般からの出席はあまり多くなく、宣伝の面でやや課題を残している。何より調査を行いながらの「講演」準備は、毎回綱渡りの作業である。今後は調査参加者たちも交えた成果報告会にできないだろうか、と考えている。

これとは別に、古文書の連続講座として「古文書から見えてくるもの」と銘打ったシリーズを始めることとした。崩し字の解読講座ではなく、古文書を学ぶことで分かることは何なのか－活字では残せない情報は何か－、を意識したものである。崩し字を読むことの関心を高めて、尾鷲古文書の会の裾野を広げていこうとの意図もあった。テーマも内容もいささか高度なため、古文書の会のメンバーにプラスアルファくらいの参加者を想定していた。

第１回目の講座は2004年２月20日に、市立中央公民館で開催した。古文書の会で、関心のありそうな方にチラシを送って頂いたそうだが、ポスターを貼った訳でもマスコミを通じて大々的に宣伝した訳でもない。紀伊長島町のある人からは、尾鷲は文化的意識が低いから（！）、

そんな講座に人は集まらない、という「警告」を受けた。しかし蓋を開けるとなんと70名もの人が会場に来て下さった。多めに用意した筈のレジュメ40部ではとても足りず、椅子を他の部屋から運び入れる作業にも追われた。２万人強の人口の尾鷲市でこの人数は驚異的と言える。十倍近い人口を持つ津市で、大学の公開講座の参加者がどれほど居ることであろう。この講座は、秋以降には相次ぐ台風・水害被害や塚本の私的な都合等で計画の変更を余儀なくされたが、これからも随時開催する予定である。

尾鷲古文書の会の輪読会は、相変わらず月に２度、みっちり２時間半の開催が続いている。都合が付くと私も出席するのだが、その熱心さには舌を巻く。ただ読むだけではなく成果物を出そうということになった。会員のお一人、濱中良平さんのお宅に伝来した古文書のなかから、幕末の２つの道中日記を翻刻し、三重県紀北県民局の支援を受けて2004年３月に『尾鷲賀田濱中仙右衛門 幕末江戸道中・滞在日記』として刊行した。厳密な校訂を施し、参考史料や解題も付いた、充実した史料集となった。単年度企画ではなく永く継続させようとの意志を込めて、「尾鷲の古文書（１）」と銘打っている。

この時には、史料の校訂や編集、内容のチェック修正等は「顧問」として私がかなりの分を担当した。だが今年度編集作業を進めている「尾鷲の古文書（２）」では、市民側の技能が向上し、私の負担も軽減された。市民のみの手で、学術的評価に堪える史料集を刊行できるようになることも、そう遠い日ではないだろう。文化財の価値を評価し、それを守り、活用できる人材が、着々と地元に根付きつつある。

以上の事業は、崩し字史料に関心を持つ人に向けたものである。もっと身近に手軽に古文書の世界の魅力を伝えねばならない。そう考えて、地元新聞に「尾鷲組大庄屋文書の世界」と題した1000～1200字程度の連載を持つこととした。文章のみでなく崩し字史料を写真で示して翻刻も付け、その内容を出来るだけ分かり易く紹介することを心掛けた。

尾鷲には、紀伊長島町までをエリアとする南海日日新聞と紀勢新聞という２つの地元新聞がある。津に住んでいる人間には全く馴染みのない新聞だが、地元では朝日新聞や中日新聞などとは比べものにならないほどの影響力を持つ。ほとんどの家庭では、両紙のうちのいずれかを講読しているという。異例のことだが、この両紙に同時並行で、隔週の連載を行うことになった。2005年２月末現在で、第26回を数える。私のほか、大学での演習（後述）の成果を反映させて、一部のゼミ生も執筆している。調べた内容を1000字ほどにきっちりとまとめることは、文章作成の良い訓練にもなっているようだ。

地元の知人からは時々話題にのぼせて貰えるが、一般の方々にどの程度この連載が読まれているのか、まだ手応えがない。だが講座・講演等の反応の良さは、一つにはこれが影響していると思いたい。なお、この連載はある程度の数が揃った段階で、一般向けの冊子にまとめようと計画している。

大学側が地域に出て行くだけではなく、市民を大学にお呼びして話をして貰うことも試みた。人文学部ではこの間、中川正さんを中心に、あらゆる立場の人が平等に、「法則」をキーワードに自由で開放的な研究交流を行う「法則研究フェスタ」という催しを計画していた。2004年２月11日に開催された第１回の「法則研究フェスタ」に尾鷲から川端守さん、濱中良平さんをお招きし、それぞれ「海が地域を育てる法則」、「尾鷲林業発展の法則」をお話頂き、身振り

手振りを交えての熱弁は学生・教員、一般市民を含む聴衆に大変好評であった。なお、今年度に開催された第２回の法則研究フェスタでは、「江戸時代の尾鷲の法則」と称するカフェ（分科会）を設け、卒論組や社会人履修生の報告を得た。全体会では科目履修生の板倉啓太郎さんが、したたかにたくましく藩役人と交渉する、幕末の須賀利の人々を分析した報告をされ、聴衆の投票により「アカデミック大賞」を受賞されたことを特記しておく。

大学独自での作業としては、東紀州地域に関する歴史・考古・民俗・自然・建築等の各領域を含む総合文献データベースの作成を試みた。三重県史編さん室の情報提供や助言を得て、明治以降1966年までに刊行された三重県に関係するあらゆる分野の文献データと、1967年以降の主要な関係雑誌の文献データ、東紀州地域の古文書目録のデータ等、計約１万2000データを入力した。ただ情報の精度は低く、点検や、また地域・分野・時代毎に分類・加工する作業が残されている。また、これはあくまで文献のタイトルデータに過ぎない。情報は現物があって初めて価値を持つ。データベースに合わせて現物（勿論複写で）を出来うる限り集め、いつでも閲覧に供することが出来れば、三重大学が地域の情報センター的な役割を果たすことが出来よう。2003年度は、そのような見通しも持って基礎作業を行ったのである。

２、暗転－支援事業の打ち切り－

2004年３月末、たまたまこの事業の会計処理を担当する研究支援課の事務室に居た私は、文科省から送られた１枚のＦＡＸを見せられた。そこには驚くべき内容が記されていた。この年度に三重大が得た地域貢献特別支援事業費は総額6000万円であった。これは２か年の事業として募集され、申請も受理されていた。採択後に提出を求められた計画書も、２か年事業として記したものであった。だが、この時に突如、地域貢献特別支援事業は打ち切り、事業継続中の大学については次年度の別途枠組みで申請を認めるが、それは一律1500万円の予算とする、との通告がなされたのである。

予算が４分の１になる、という事実は衝撃的であった。当時の事務担当者（現在は三重大を離れている）は、「これは詐欺です」と吐き捨てた。計画を大幅に縮小しなければならないだろう、との見通しを聞かされた。だが私にとってはそれどころではなかった。1500万円を８事業で単純に割れば200万円弱となる。しかし翌年度も事業が継続されることを前提に、既にそれをはるかに上回る分の作業を、関係する業者さんに発注してしまっていた。

しばらくは眠れぬ日が続いた。文科省は大学を泣かし、大学は地域の業者を泣かすような、下請けイジメの構造は絶対に許してはならない。銀行の預金通帳を睨みながら、200万円までならば自分で負担することができ、とりあえずそれで何とかなる、と判断した（私費を一部投入することで、成果物がこちらの意志とは無関係に扱われることを避けられる、との「計算」もあった）。思い返せば悲壮感に過ぎた反応であったが、その時は少し吹っ切れた気分で、時期遅れの財団等の補助金申請を検討し（結果は手遅れで、空振りに終わった）、同時に大学首脳部との交渉にあたった。

尾鷲事業の出発点となった「三重大学人文学部フォーラム」も、2003年度には地域貢献特別

支援事業の一つとして予算化された経緯がある。新年度にその分がどうなるのか、フォーラムを中心に担われる友永輝比古先生、廣岡義隆先生は大変心配なさった。また、８事業の１つ「バーチャルミュージアム『伊勢湾博物館』の構築と運用」プロジェクトを担当された山中章先生も、私と同様に金銭問題では苦慮しておられた。

研究担当の副学長・森野捷輔先生からは、文科省の説明としては国立大学の独立行政法人化に伴い「地域貢献特別支援事業」は別立てで予算化せず、運営交付金のなかに溶かし込んだのだ、とのことであった。だが、その分を積算して運営交付金を増した形跡はない。またいわゆる研究ＣＯＥなど、独立行政法人化後も引き続き募集が行われている企画もある。研究、教育に比して「社会貢献」については、文科省も所詮その程度の扱いなのか、と憤慨した。

しかし「地域に根差す」ことをスローガンとして掲げた三重大学の立場は別である。地域と連携して始めた事業を、文科省からの予算が削られたからと言って一方的に打ち切ったならば、地域社会の信頼を損ねることになろう。まずは他大学にも働き掛けて文科省に強く再考を要望し、もしどうにもならないとすれば、三重大学で独自の対応をする必要がある。私たちはそう考えた。とにかく黙っている訳にはいかず、学長サイドに要請書を出そうという話になり、私が原案を作成して、関係者の連名で豊田長康学長、森野捷輔研究担当副学長に宛てて提出した。その内容は以下の通りである。

三重大学学長　　豊田長康　先生
三重大学副学長（研究担当）　　森野捷輔　先生

要望書（地域貢献特別支援事業について）

日頃学内行政に御尽力頂き、深く感謝申し上げます。

御多忙の折り恐縮ですが、お願いの儀がございます。私たちは、地域貢献特別支援事業の継続をめぐり、これまで活動してきた立場で話し合いを持ち、総意で大学の運営の任にあたられている先生方に要望書を出そうと考えた次第です。御検討頂きます様、よろしくお願い申し上げます。

まず今回の事態は、何より文科省の信義に悖る対応が原因だと考えます。２か年事業として募集し、私たちも２か年の計画書・予算案を提出してきました。新年度が始まる時点で、予算が４分の１になるとの情報に接し、愕然とした次第です。

補助事業の性格上、計画の変更は大学だけではなく地域にも大きな影響を及ぼします。もし予算措置がこのままで終わるならば、大学のみならず地域に対する裏切りだと言わざるを得ません。今回の問題に限らず、今後文科省が同じような対応を取ることを防ぐためにも、きちんと抗議・要求することが、まず必要だと考えます。

私たちは、昨年度に引き続き地域貢献特別支援事業を行う予定であった１１大学に強く呼び掛け、連携して文科省と交渉すべきだと思います。加えて、今回の事業の性格上、関係する自治体に声を上げて頂くと効果的ではないでしょうか。私たちの連携先は、協力す

る旨の内諾を得ております（こうした動きも、大学と地域との「連携」の成果と考えます）。

また、文科省からは運営交付金のなかで支出せよ、との指示があった由ですが、それならば運営交付金の積算を上積みすることを当然求めるべきではないでしょうか。

とはいえ、これ以上の補助金がおりない場合に、三重大学としてどう対応するのかを考えておかねばなりません。

三重大学は中期計画において、「地域に根差す地域圏大学」たることを高らかに謳いあげました。私たちは、都会の大学にはできない地域密接型の活動を通して、三重大学がその特質を発揮し、三重から世界へと発展することを目指す高邁な目標に、強く賛同する次第です。

中期計画の策定作業と並行して、三重大学は尾鷲市、四日市市、上野市など、関係自治体・機関と相互友好協力協定を結んできております。これを実質化するために努力しなければなりません。自治体の関係者からは、三重大学は具体的に何をするつもりなのか、との厳しい声もうかがっております。

中期計画の理念と関係諸機関との相互友好協力協定の趣旨からすれば、本来、外部資金の交付とは無関係に、三重大学独自の事業として地域連携を推進しなければなりません。もちろん、外部資金の獲得には私たちも努力します。しかし、文科省からの補助金が事実上打ち切られたからといって事業を縮小・中止することは、あってはならないと考えます。

今回、同様の立場に置かれたのは三重大学だけではありません。それぞれの大学でどのような対応を取るかで、地域連携に取り組む姿勢・意欲が計られることでしょう。文科省の対応には大変不満ですが、しかし文科省は「運営交付金で手立てをするように」との意向を示したのであり、事業の縮小・中止を求めた訳ではありません。４分の１に減額された費用のみで対応し、独自の財源（運営交付金）をあまり用いずに事業を縮小・中止したならば、三重大学の地域連携への取り組みは、文科省からも地域社会からも、どのような評価を受けることでしょうか。

研究、教育、地域貢献。この三つがこれからの大学を評価する重要な柱となる由、文科省関係者からも聞いております。三重大学は、現在のところ残念ながら文科省の補助金交付の面では、地域貢献しか評価を得ておりません。もちろん今後、研究・教育面の補助事業採択を目指さねばならないことは言うまでもありませんが、まず、唯一評価を受けている「地域貢献」で、きちんとした成果をあげなければならないと考えます。

私たちの昨年度の作業は、単年度で終わることを想定してやってはおりません。今年度の事業の前提として、また、来年度以降も継続・発展することを目指してきました。

例えば様々なデータベース構築を進めてきましたが、補助金が大きく減額されれば完成を断念せざるを得ません。これらデータベースは、地域に極めて有益な情報が提供できるもので、三重大にとっても大きな財産になると考えておりました。今のままでは、やむなく外部団体や他大学に中途のデータを提供して、その完成を委ねることも検討します。せっかくこれまで積み上げた作業が、三重大学のものにならないことは、残念でなりません。

３年前から実施している人文学部フォーラムは、関係する自治体、ＮＰＯ等の民間団体、文化事業を担う市民の方々と様々な連携を生み出す母体となりつつあります。しかもこれは、人文学部のみでなく、学内５学部の皆様に広く関わって頂いています。

県下の関係諸団体、博物館等文化施設のみならず、周辺大学等との連携も緒についてきたところです。「最低限必要な、形だけ整える補助金」では、そのようなせっかくの萌芽が摘み取られてしまいます。

財源の厳しさは、洩れ伝え聞いております。私どもには想像もつかない、大変な御苦労がおありのこととは存じます。ただ、私どもは別の情報にも接しております。

昨年度、独法化の移行に伴う経費が必要のため学長裁量経費は公募できない、との説明がありました。私どもの活動も、地域貢献特別支援事業の交付がなければ危機に瀕するところでした。しかし、研究・教育ＣＯＥなど外部資金獲得経費として２４７０万円もの額が支出された旨、教授会で報告がありました。私たちは実績をあげている事業を発展的に継続できるよう、限られた財源を効果的に運用できるよう、御配慮下さることを強く願っております。

三重大学の地域貢献特別支援事業の活動については、新聞社等マスコミ各社も色々な形で取り上げてきました。今年度の事業についても、関心が寄せられています。三重大学の対応が、自治体や関係諸団体、地域住民の方々に理解され、支援して頂けるようなものになることを、強く希望します。

「バーチャルミュージアム『伊勢湾博物館』の構築と運用」
プロジェクト代表　　山中　章

「東紀州地域の文化的遺産の掘り起こしと活用」
プロジェクト代表　　塚本　明

「三重大学地域拠点づくりｉｎみえ」（三重大学人文学部フォーラム）
プロジェクト代表　　友永　輝比古
廣岡　義隆

この要望書についての直接の回答は得られなかった。結果として示された予算案は、４分の１に削られた1500万円のうち、山中先生及び私の担当プロジェクトは相対的に手厚く手立てされており、また人文フォーラムについても維持・運営できるだけの配慮がなされた。このことについては、感謝しなければならないだろう。私自身も自分の預金通帳を持ち出さずに済んだ

のであるから。だが、依然として何故このような事態に立ち至ったのか、根本のところで問題にしなければならなかった筈だ、との思いは強い。「地域貢献」を掲げた独自の事業費は打ち切られ、私たちの事業は「大学改革推進経費」の１プログラムとしての位置付けになった。文科省の見識のなさもさることながら、地域連携についての大学の姿勢－三重大学を含めて－の弱さが、根底にはあるのではなかろうか。

事業途中で補助金を打ち切られ、「被害」を蒙った大学は、11大学にのぼる筈である。これらが連携して声を挙げれば、一定の力になったであろう。事実、金沢大学が音頭を取り、文科省へ陳情に行く計画が立てられたが、それに賛同し同一行動を取ったのは、わずか４大学に過ぎなかったという。「お上」に楯突くことが出来ない気弱さだけではない。私は、「地域連携」に対する姿勢が、大学によって大きく異なるのを感じる。

2004年１月末、地域連携に熱心に取り組んでいる金沢大学において、大学の地域貢献についてのシンポジウムが開催された。菅原洋一先生のお勧めで私も出席が許され、冬の金沢を訪れた。４大学の報告に16大学のパネル展示があったが、率直に言って真摯に地域連携を意識して活動しているところと、補助金を得る手段としての思惑が透けて見えるところとがあったように感じた。文科省の地域貢献特別支援事業の打ち切りという「暴挙」も、それに強い抗議の動きが構築されなかったことも、こうした点が背景にあったのであろう。

なおこの時に、三重大学の事業について菅原庸副学長（当時）が報告されたが、控えめに見ても他大学の事例に劣らない、立派な内容だと感じることが出来た。重要な要素は、私たちが連携した「地域」の中味である。他大学の多くが、商品開発を通した企業との連携（産学提携）であったり、あるいは行政との連携に留まっているのに対して、私たちは市民、市民グループと連携を試みた。そして、これは「人文フォーラム」の一貫した姿勢なのだが、地域から学ぶ、という姿勢で取り組んだ。私は小グループに分かれての研究会の場で、地域に出てこそこちらも学ぶことが出来る、私たちのやっていることは一方的な社会奉仕なのではない、相互に影響し合う活動を目指すのだ、ゆえに私たちは「地域貢献」の語を用いず「地域連携」を唱えている、との趣旨のスピーチを行い、好評を得た。

シンポジウムの基調講演では、これからの大学の役割は研究、教育、地域貢献が３つの柱になる、知識の活用こそが大切で、ここに大学改革が掛かっている、との指摘もあった。弊害が指摘される研究ＣＯＥや、いわゆる教育ＣＯＥに比べて、地域貢献特別支援事業の立案は文科省の大きなヒットである、との声もあった。地域社会のなかで生きていこうとする大学にとって、大いなる可能性を感じられたシンポジウムであった。だが、残念ながらそこで共有された感覚は、文科省の政策には反映されなかったようだ。

３、大学での活動

この間、私の演習（日本歴史演習Ⅱ及びⅤ）では、尾鷲をフィールドとして地域研究の方法を学ぶ授業を進めてきた。３年前に始めた時には、崩し字史料を基本テキストとするのは学部

学生にはいささか酷かと思ったが、その時にはまだ崩し字の解読のみに留まっていた。これが、いつまでも「卒業」しない社会人の常連さんが居るために、年々レベルアップしていく。単位認定と関係なく履修するゼミの学生・院生たち、そして社会人も増え、３年続けての履修者は５名を数える。川端守・美智子御夫妻、板倉啓太郎さんの「初期メンバー」に加えて、歌人でもある神谷眞知子さんが科目履修生として加わり、地元経済界で活躍された鈴木重雄さんも社会人入試で３年次に編入され、この授業を熱心に受講された。さらには同僚の地理学者、中川正さんが履修されるようになる。地理学においては既に定評のあるお仕事をされてきた方だが、その位置に安住することなく別の専門性をも求め、技術を一から学ぶという勇気に感じ入った。

授業の参加者中、年齢順に並べると、私は上から７番目なのである。若い学生さんたちと違い社会人の皆さんは、分からないことを聞くのに躊躇もためらいもない。教師の知識などたかが知れているということを知ってか知らずか、こちらの困る内容に限って「的確な」質問が寄せられる。うかうかしていると足元をすくわれかねない。質問の集中砲火を浴びておたおたすることもあった。私にとって、刺激と緊張に充ちた、珍しく（唯一の？）楽しい授業である。

社会人同士も刺激し合って向上していく。今年度後期第１回目の鈴木さんの報告は、現在でも語り草である。全くの初心者でわずか半年間授業に出席しただけなのに、担当する４枚ほどの崩し字史料をほとんど全部読み切り、史料の解釈や背景も詳細に報告された。鈴木さんによれば、これまで授業で出された史料やレジュメ、そして『尾鷲市史』などを全部読みなおし、取り組んだ結果だという。他の社会人の方が対抗心や闘志を燃やされたのが、授業中に見て取れた。こうした授業はこたえられない。まったく教師冥利に尽きる。

10月以降には、９月の調査を受けて、各人が調査時に興味を持った文書を取り上げ、崩し字の解読とその上での分析・研究報告を行うようになった。崩し字を解読するのは、授業時間の内でほんの10分から15分程度に過ぎない。関係する史料や研究史を突き合わせて、取り上げた史料がどのような位置を占めるのか、新たに何が分かるのか、課題は何か、などをまとめた報告が続いた。受講生たちにとってこの報告の準備は相当な負担であったようだが、まじめに取り組んだ者は、史料を深く「読む」ことの楽しさを感じることができたであろう。本年度の４年生は昨年度の演習報告の成果を卒論に活かした者が多く、本格的な分析がいくつも生まれた。これらはいずれ、本誌にも反映させて行きたいと考えている。

さて、授業とは別に地域共同研究センター（2004年４月から創造開発研究センターに移行）を拠点として、岩田昭人客員教授を招いての「尾鷲を語る会」という勉強会を開催することとした。これまで三重大学内部では個別の教員・グループで尾鷲（東紀州）を対象とする研究や社会活動が行われてきた。それらの横の連携を作り、個別の研究成果についての情報交換をし、同じフィールドでの学際的な交流を持つことにより、新たな地域学を構築することが出来るのではないか。そう考えて、学内教員のうち関係しそうな方々に片っ端からメールを送り、賛同頂いた方で会を立ち上げることにした。メーリングリストは48名（学内教員で36名）にのぼり、６月28日を第１回として2003年度・2004年度合わせて、合計16回開催した。参加者は学内の５学部全てにわたり、歴史、考古学、言語、地理学、経済学、食文化、そして海洋資源学など幅広い分野の報告も得た。あまり身構えずに気軽に情報交換をしようとの趣旨から「語る会」と

名称を付けたのだが、思いに反して周到に準備された研究報告が続き、内容のレベルはかなり高度なものであった。

大学という場は、身近な同僚でさえもその研究の成果に触れる機会は決して多くない。ましてや他学部の先生方とは、学内の委員会仕事を除いてはほとんど交流がないのが実態である。フィールドを共通にすることで学部をまたぐ学際的な研究グループを形成できれば、科研や外部資金の申請団体となったり、地域貢献特別支援事業において２年目に発展的な活動を展開する際の有力なネットワークにもなる、との意図もあった。

毎回の報告と質疑応答の内容をまとめ、メールで関係者に「尾鷲を語る会通信」として送付した（これは、創造開発研究センターのＨＰに掲載されている）。まとめにあたっては報告者と改めての内容確認をすることになり、結構大変な作業ではあったが、違う分野の勉強を随分させて貰ったと思っている。学際的研究の必要はあちこちで叫ばれながら、うまく機能する企画は稀だ。試みとしては、良い勉強会であったと思っている。

しかしながら、「語る会」は残念ながら成功したとは言えない。正直なところ、その維持・運営は精神的に辛かった。報告者の確保（依頼）に苦労し、しばしば並行して開催している人文フォーラムｉｎ東紀州での講師担当の方に「同じ内容で結構ですから」と頼んだことも少なくない（それはそれで、意味のあることだったが）。何より、一番の目的であった学部を横断する幅広い参加者が、なかなか得られなかった。当初から参加者は10名前後、メンバーは次第に創造開発研究センターと人文学部及び身近な一部の市民に限られていった。

事後報告の「尾鷲を語る会通信」には時々他学部の先生からも感想を頂くことがあり、それなりの認知はされた。活動自体は無駄ではなかったと思う。参加者の少なさは、企画側の努力不足に加えて、大学教員が忙しくなりすぎたことがあろう。報告者と企画者側の日程調整を付けるだけで精一杯だったため、参加したいが授業や会議と重なった旨の連絡はしばしば頂いた。

独立行政法人化して、一体どれだけ雑用が増えたことか。本来、大学の教員として行うべき職務は、会議とか書類作成などよりも「研究教育活動」である筈だ。だが実態はそうではない。義務ではない催し物に参加するだけの余裕をなくしているのが、現在の大学だ。

だがもう一つの背景に、昨今の多くの大学教員が、自分の研究領域とは無縁な企画、直接役に立たないことに関心が薄い、ということがあるのではなかろうか。問題は、そのことが大学が地域連携を行う上での最大の障害となるのではないか、ということだ。

県や市町村の行政が、大学の教員に対して事業委託をする場合がある。だが、自分の研究のフィールドとしてしか考えないのであれば、地域の需要とはズレを起こす。個人の研究ならば自分の思うままに行えばよい。だが「地域連携」とは、地域の要望がどこにあるのか、そのなかで自分の研究がどのように位置付くのかという応用問題であることを、最低限意識しなければならない。

これは地域に入って行う講演会ひとつとってもそうである。学会での議論とは違い、別の世界の人に説明するには異なるエネルギーと工夫が必要だ。しかも、専門的な意味での有益な意見を得られる可能性はほとんどない。何か別の価値、意義を感じられなければ、単なるアルバイトになるか自己満足の行為に終わるかであろう。かと言って、行政側が求める内容をシナリオ通りにこなすだけならば、私たちがそれを務める意味は全くない。

4、歴史学と地域社会

大学（教員）が行うべきことは先ず何より研究と教育であり、地域貢献などと社会に媚びるような活動はするべきではない、との考えもあるようだ。そこまで露骨に言わずとも、地域での活動を必ずしも高く評価しない雰囲気は、大学という世界では根強い。三重大学が「地域に根差す」というスローガンを掲げた時、小さくない反発があったと聞く。「自分の研究は全国的、世界的な価値を持つものだ」「専門的学問は、直接に地域に還元できるような性格のものではない」との主張は、尤もな面もあるとは思う。ここでは、あくまで歴史学を学ぶ私の立場での考えを述べることとしたい。

人文フォーラムが始まったきっかけは、基本的には地域（地元）から支持される大学でありたい、との思いからのことだったろう。山形大学の教育学部が他の近隣教育学部と統合される計画が示された時、地元の多くの自治体から反対決議が上がり、撤回された。大学が苦難の道を歩むことが予想される状況下、地域圏大学たる三重大学は、地域社会とかけ離れては存続しえない。そうした危機意識は確かにある。特に人文学部は、その活動が外から見えにくい組織であり、技術や卒業生の就職先を通して、体制的に社会と関わりを持っていける学部ではない。だからこそ、フォーラムのような企画を進めなければならないのだ。同時にフォーラムを行っていくなかで、一般市民向けに分かり易く専門の話をすることは、授業の質の向上につながる（ＦＤ＝ファカルティ・ディベロプメントの必要も、近年強く指摘されている）、という相乗効果も意識されるようになった。

肝心なことは、地域への単なる「サービス」ではなく、現地で開催することによって、また一方通行の講演ではなく相互交流を目指すことによって、こちらにも多々得る点があることだ。必ずしも全てがうまくいった訳ではないが、フォーラム事務局に入って２年目の私でも、講師の方々と一緒にフォーラムに参加することは決して苦痛ではなかった。時には熱気に溢れる質疑応答に、大いに刺激を受けたこともあった。友永先生が作ったキャッチフレーズ「地域の人々に語り　地域の人々に学び　地域の人々に根差す　小さな文化運動」は、フォーラムの特質と魅力を余すところなく伝えていると言えよう。

もちろん、大学教員でも自分の専門とする学問分野によって地域社会との関わりは変わって来るだろうが、歴史学－日本史は、とりわけその中核の一つにならねばならないと考える。

三重大学に赴任して以来「歴史学概論」という講義において、Ｅ・Ｈ・カーの有名な文句を引きつつ、歴史学とは過去のことを調べること自体が目的なのではなく、現代との緊張関係の上に成り立つ学問である、と繰り返し述べてきた。歴史小説や歴史ドラマから歴史学に興味を持った学生たち、織田信長や坂本龍馬の生き方に単純に憧れるゼミ生に、歴史知識の素朴な面白さではなく、学問としての歴史学の特質を伝えようとした。

歴史を学ぶ目的は、単に過去に起こった事件を知ることにあるのではない。時代の変遷によって「視点」が変わり、史実の解釈も変わるのだ、だからこそ自己の視点の確立が重要で、それは現代と自分がどのように対峙するかで決まるのだ、といったことを滔々と語っても見た。また歴史学に対して加えられた様々な圧力や事件を紹介し、歴史学の「現代性」を説明もした。

だが、そのように授業では述べながら、自分自身ではある虚しさを感じていた。今の歴史学が、いったい現代社会とどのような緊張関係を持ち得ていると言うのだろう。これは、都会に住み学会の委員を務めていた頃に、年次毎の「活動方針」と実際の研究活動とのギャップを常に感じていたことの延長上にある。

自分が「仕事」としている歴史学とは、一体何のためにあるのか。中学・高校以来、歴史的知識を身に付けることが必ずしも好きではない私にとって、これは深刻な設問であった。抽象的・高踏的議論や細密さが自己目的化した実証研究の流行にいささか辟易したこともあり、京都を離れ三重に移り住んだ後は、学会なるものと次第に距離を置くようになってしまった。

４、５年前の日本史研究会の大会シンポジウムにおいて、戦後歴史学を総括し、現代の歴史学が社会に何の貢献もしていない、といった挑発的な報告がされたことがあった。私も多少の反発を感じながらこれを聞き、歴史学界の中心を担う方々からどのような反論が出されるのか、固唾を飲んで見守っていた。だが、この点の反証としては、結局のところ自治体史や史料保存活動などが挙げられるに留まった。この事実に私は、小さくないショックを受けた。党派性やあまりの素朴さから自然消滅した「国民的歴史学運動」の地点すら、今は遠いのだ。

尾鷲での人文フォーラムに参加し、尾鷲の人々と出会ったのは、ちょうどその頃である。

尾鷲古文書の会のメンバーは多士済々で、三教組の闘士としてならした方、海山の原発反対闘争に関わった方、福祉や平和をめぐる運動に参画される方々などが含まれる。現代との強い緊張関係を持っている人々が、江戸時代の話を熱心に聞き、そして私と一緒に古文書調査や、それに伴う事業を嬉々として行って下さる。もしかすると歴史学には、私にはまだ分からない「力」が潜んでいるのだろうか。歴史学が社会において持つ役割・機能について懐疑的になり気持ちが萎えかけていた私にも、少し勇気が湧いてきた。授業に熱心に参加される社会人を見るにつけ、歴史学などという学問は、むしろ人生経験を積んで年を取ってから関心を持つものであろうか、などとも考えた。

地域で歴史の話をする際に、参加者から、著名な武将や皇室関係者とその地域とのつながりを誇らしげに語られ、それについてのコメントを求められることがある。こうした郷土顕彰からの骨董趣味的歴史が、私は何より苦手である。だが尾鷲古文書の会は、そのようなタイプの人たちのまとまりでは決してない。中心メンバーのお一人の川端守さんは、「尾鷲は古代から現代に至るまで（「現代」がポイント！と言う）、一貫して政治とは無縁の地であった」「天皇・上皇も将軍も、貝原益軒も、柳田国男も宮本常一でさえも来ていない地である」と誇らしげに語る。同じ東紀州でも矢ノ川峠を越えて熊野市に入ると記紀神話の世界が広がり、政治史の場ともなるが、尾鷲にはそうした伝承は全くない。尾鷲を著名人や由緒で語ろうとしても無理である。その一方で、尾鷲組大庄屋文書などには、これまでの江戸時代史のイメージが変わるような、海と山と道で結ばれた、躍動感溢れる人々の世界が充ちあふれている。この落差が、新鮮な驚きが、私たちを虜にするのだ。

基本的には、「政治」とは無関係に、どんな地域にもそれぞれ特有の価値があると考えたい。中央権力に抵抗したことをもってその地域の価値を計るという発想は、将軍・天皇や著名人が訪れなかったから語るべき歴史がない、というとらえ方の裏返しにすぎない。尾鷲の個性は、

そのどちらでもない、政治とは無縁だったところにあるという見方は、実に新鮮である。

なおこれは、現代の尾鷲の魅力にも通じる。物も情報も過剰に溢れかえった都会、刺激の多さに疲れ果てる都会、それに対して尾鷲には「何もない豊かさ」がある。特別なものがなくても、当たり前のものが当たり前にすばらしい。これは、心穏やかに文化的営みを送るための、大事な条件だ。

歴史学にとって、現代の社会、現在の地域にどのように「貢献」できるかは、学問内在的に重要な課題であるはずだ。地元の人々は、過去の歴史とつながることで誇りを持つことができ、それは、より住みやすい社会を築いていくための力になる。そのように信じたい。そしてその過程を共に経験することで、私たちの立場での課題もまた、色々と見えてくる。

私にとって尾鷲は、歴史を学ぶことの意義や楽しさを実感できる場であり、そこでの活動は、自分の仕事に誇りを保つためのものでもある。

5、地域に求めるもの

これまで、大学が地域と連携していくことの魅力と可能性を中心に述べてきた。だが、地域を美化してはならないし、連携しさえすれば良いというのでは決してない。大学と地域とは、ある緊張感を保った関係であるべきだ。大学側の一方的なサービスであってはならないし、地域側も大学に対して、自分たちの要求や考えを突き付けていくことが望まれる。

私たちは人文フォーラムでもそれ以外の企画においても、行政から、また地域住民から厳しい意見を頂くことを歓迎した。きれい事ではなく耳の痛い発言は私たちの活動を鍛えてくれる。

フォーラムでは、毎回参加者にアンケート調査を実施している。面白いか、分かりやすいかのみでなく、自由に意見を書いて頂くと、かなり手厳しいコメントも目立つ。単位を必要とし、日常的に教員と関わっている学生の授業アンケートとは訳が違う。フォーラム事務局としては、自分たちへの評価ならばともかく、無理にお願いした講師の先生に対して否定的な意見が寄せられると、とても辛い思いをする。

だが、これは乗り越えなければならない壁である。そして幸いなことに、フォーラムに協力して頂いた教員の大半は、市民の声に謙虚に耳を傾けない人たちではなかった。

来年フォーラムを実施する志摩市では、参加者とのミスマッチを起こさないために、予め話す内容について講演者に注文が付けられた。これこれの資料を提供するから勉強しておいて欲しい、とまで言われたという。しばしば大学教員が、地域の求めることとかけ離れた自己満足の講演をすることの苦い経験があったのだろう。

行政は、通常は大学に遠慮しがちである。ホンネを押し隠して大学教員に心地よいお世辞を言うことも多い。うまく行っていると思っていたのに、酒の席でホンネを聞き、その手厳しさにぞっとしたこともあった。考えて見れば当然のことであろう。私たちにとって研究の素材に過ぎないものであっても、その地域の人たちには、生活の懸かった問題なのだから。

幸い東紀州でのフォーラムは地域の人々に好評で、初年度の尾鷲市に続き紀伊長島町、海山町、再び尾鷲市と４年間開催を続けるなかでこの地に定着しつつある。我々が苦労して宣伝せ

ずとも、口コミで参加する人が増加した点が、何より嬉しいことであった。そして、いずれの市・町においても、行政の皆さんが会場設営から宣伝活動など大変協力的に関わって下さった。チラシの全戸配布をお願いした際にも、快く受けて頂いた。行政が主催しない場合は本来一定の金銭負担が求められるものだと知ったのは、後のことである。

だが、各地で展開しているフォーラムでは、必ずしも同様ではない。あるフォーラムにおいては、その地の行政関係者が誰も参加されないこともあったと聞く。行政の立場からすれば、頼んだ訳でもないのに「押しかけてきた」存在なのかもしれない。だが私たちは、会場の提供を受ける以外に自治体に何の負担も掛けず、また自分たちの利害とは無関係に文化的な貢献を目的に出掛けているのである。決して「行ってやっている」「講演してやっている」などという姿勢ではないが、「ありがた迷惑」と思われては悲しい。どんな自治体にも文化事業を担当する部署がある。なぜ、私たちの活動をもっと活用されないのか。命じられた仕事のみをこなすところから、真の文化は生まれない。大学においても行政においても。

尾鷲ではないが、教員と学生とが共同して、ある地域の総合研究に取り組んだことがある。一人の大学院生の調査・分析は、行政にとって耳の痛い結果となりそうであった。大学院生は、真剣に課題に取り組み、改善の方策も含めてレポートを作成した。しかし、その過程において行政側の妨げがあり、当初約束された支援はなくなってしまった。我々は、行政の施策にお墨付きを与えるために存在するのではない。御用学者となることは私たちの自殺行為であり、そして地域を堕落させる。

地域への講演会とはやや性格が異なるが、中学や高校に大学教員が出向いて講義を行う「出前授業」という制度がある。受験生を勧誘するという意味合いもあるが、先生方も含めて交流を図り、地域社会に何らかの役割を果たすという目的も含んでいる。以前にある高校から、私が出前授業の「メニュー」としてあげていた「江戸時代の若者たち」の話を通して人権学習を行って欲しい、という依頼があった。想定しなかった難しい課題だが、それこそ私の仕事の意味が問われることになる。事前にその学校における人権学習の資料を見せて頂き、十分な準備をして出前授業に臨んだ。対象は２学年全員約400名。事後にアンケートを実施して、生徒たちの評価と人権学習としての効果を把握しようと試みた。400枚のアンケートを集計・分析し、人権学習としてどのような成果があったか、なおどこが足りないか、学校でその後どのような点を補い、何を留意して頂きたいかをレポートにまとめて、メールで送った。先生方の感想もお寄せ頂ければありがたい旨も記した。だが、いかなる反応も、メールを受け取ったという返事すら、頂けなかった。

フォーラムにしても出前授業にしても、タダだから利用してやろう、という程度の姿勢ではあまりに寂しい。私たちは何も賞賛の言葉を求めているのではない。いわんや、お金を欲しているのでもない。出前授業など、交通費すら自弁なのだ。しかしこちらの労力に対して何も応えようとせず、本来自分たちで行うべき人権学習に置き換えてそれでよしとするだけならば、教育者として、いやそれ以前に働く者として失格ではないか。人権問題に取り組む先生方の反応を聞き、お互いの課題を確認したい、それを通じて私たちの活動も更に質を高めたいと考えた私の思いは、全くの空振りに終わった。全員とは言わないが、熱心に聞いてくれた生徒たち

に助けられたが、お手軽で便利な制度としかとらえず、安直な姿勢をとる相手との「地域連携」はやるべきではないとすら思う。行政においても同じである。その地に眠る古文書資料の調査を、しかも手弁当の調査を、「やらせてやる」という態度で接する担当者も居た。

先に触れた尾鷲での「古文書から見えてくるもの」シリーズ講座は、2004年度には補助金が削減されたために予算的な手立てが出来ず、交通費も含めて一切を手弁当で行った。だが、毎回終了後に有志が集う川端邸での「打ち上げ会」は、実に楽しい。美味しい料理はいうまでもなく美智子夫人のお陰で、毎度私の楽しみの一つであるが、参加者からも酒の差入れは勿論、目に鮮やかな郷土料理の押し寿司や新鮮な魚等を持ち寄って頂いた。私の話の感想や御意見を聞き、談論しながらの酒宴は、何とも心地よいものである。第２回目時には、尾鷲漁協理事の世古斗士夫さんからブリ（正確には「ワラサ」なのだろうが、全長８０cmほどはあったように思う）を１匹、お土産に頂戴した。妻は「寺子屋みたいね」と笑っていたが、魚好きの我が家では大喜び、刺身に照り焼きにブリ御飯にブリ大根、味噌漬け等、ありとあらゆるブリ料理を試して、尾鷲の皆さんの熱い思いとともに、数日楽しんだ。

別に食べ物を貰ったから喜んでいるのではない。地域の人たちの「気持ち」が嬉しいのである。講演などに呼ばれて話をしても、一方通行のままで、聴衆の方がどのように受け止められたのか分からず、不安のままに帰ることがある。しかし尾鷲では、密度の濃い「感想」だけでなく、その後の活動のヒントになるような声も多く聞ける。「あそこの史料に出てきた誰々やけどな、子孫はどこそこの町に住んでいて、関係するものを持ってるぞ」と言った話も聞かされた。江戸時代の尾鷲の旅籠について言及した際には、その末裔の方と面識を得ることができ、その御縁で、ある庄屋文書の存在を知ることもできた。

打ち上げ会での談論のなかで、つくづく尾鷲は「古文書が息づく街」だ、との実感を持った。江戸時代に生きた個人も集団も、その多くが現在も尾鷲の地に生き続けているのである。明治維新も高度経済成長も、尾鷲には大した影響を及ぼさなかったのではないか、とすら思った。ゆえに尾鷲において古文書は、現在とは遮断された死んだ骨董品ではなく、実はとても身近な存在なのである。

とまれ、このような市民の皆さんとの交流により、１回の講演で終わるのではなく、どんどん世界が広がっていく。それらを受け止めながら、私の拙い話を本当に皆さんが喜んで下さっていることを実感出来るのは、何物にも代え難い御褒美なのだ。

６、地域における文化と経済

－熊野古道センター問題をめぐって－

熊野古道の世界遺産登録を機に、尾鷲の向井地区に文化施設を造る計画を聞いたのは2003年の７月頃である。当初は紀北交流拠点として計画されたものだが、電源立地特別交付金が入ることから、熊野古道センターとして開設することになったようだ（建設地決定の経緯等には複雑な事情が絡むが、ここでは触れない。また準備に関わる種々の問題もあるが、現在進行中の

ことであり、ここでは措く）。どのような施設にするかは、市民の声を聞いて決めるため、ボランティア市民が集う「プロジェクトパートナー会議」を毎月開催しているという。洩れ伝え聞く内容と、その方法について若干の危惧を覚えた。市民とは東紀州在住に限定しないとのことだったので、私も一市民として、尾鷲や熊野で開かれる会議に押し掛けていった。ここでは地元の皆さんと同じ立場で本音の議論を闘わせたが、経済的に苦しい地で文化施設を造ることの難しさを思い知らされることとなる。

私は、世界遺産登録を記念するに相応しい、博物館機能と情報発信機能を合わせ持つ一級の文化施設にすべきだ、と唱えた。だが地元経済界からは、物販施設や娯楽施設など、集客機能を持つことを求める声が強かった。「博物館などに人は来ない！」との強い反発を受けた。地元の若い経済人と激しくやり合ったこともあった。

確かに、尾鷲の経済は深刻極まりない。一世帯あたりの平均所得は、県内平均に比べて100万円以上低いという。こうした数字以上に状況は厳しいようだ。熊野古道センターを集客施設とし、少しでも観光客を誘致しようとの思いは、痛いほど分かる。経済振興を死活問題として抱える地に、文化事業の展開や文化財の保存を訴えることがいかに難しいか。遺跡保存や自然保護運動、また原発・産廃施設の反対運動等でも同質の課題があろう。

価値の高い文化財は、その所在する地域のみのものではなく、広く共有されるべきである。だが、田舎にある文化財を、都会に住む学者が声高に保存を叫ぶだけでは、それは守られない。これまで多くの遺跡や文化財が破壊されたことについて、住民の意識の低さや行政の不見識を非難する学者の声は嫌というほど聞いてきた。だが田舎に住む人々にも、便利さや経済的豊かさを享受する（それを主張する）権利は当然にある。自らは「便利で豊かな」都会に住みつつ、田舎にのみ文化財や自然環境の保護・保全だけを求めるのは傲慢というものであろう。その意味で私は、地域の経済に配慮しない文化財保存運動は、成功が難しいと思う。

基本的には古道センター自体は文化的な施設として、学術的な評価に堪えるものになるべく、準備を進めている。これは、電源立地特別交付金の性格上、収益事業に用いることができないことにもよる。収益事業は別の枠組みで検討することになった。

私が直接に関わる分野では、庶民の手になる旅日記、道中日記に関する情報を徹底的に集め、「道中日記センター」としての機能を持つものにしたいと考えている。歴史的に人々は、どこから、どのような思いを持って、どんな旅をしていたのだろうか。そして、道沿いの人々といかなる交流を持ったのか。こうしたことは学術的な分析も可能であるし、同時に熊野古道沿いに住む皆さんや、ここを訪れる人々にも関心を持って貰えることであろう。庶民の残した道中日記は全国のあちこちに所在するが、それらの情報を集約する施設はまだない。そして、道中日記は虚偽性の強いテキストであるだけに、地域史料と突き合わせてこそ、その価値が増す。江戸時代以来、庶民の旅は伊勢参宮とそこから派生する熊野参詣などが中心であった。そうした意味でも道中日記の情報センターは、三重県にこそ相応しい。ここまで述べると、熊野古道センターの顧問として精力的に準備にあたっておられる海の博物館の石原義剛館長から「では道中記学会を作って下さい」などと、大きな宿題を出されてしまったのだが。

同時に、道中日記の情報収集や展示に向けての作業は、できるだけ地元の人々と連携して行

うことが命じられた。これも、私は大いに賛同するところである。今年度から市民グループと共に、道中日記の探索の旅に出て行く。

だが一方で、古道センターに隣接して建設予定の尾鷲市独自の施設は、是非、尾鷲の魅力を伝えることによる、集客機能を持つものになって欲しいと思う。海洋深層水を用いた温浴施設の計画も聞くが、これにのんびりつかった後に古道センターの展示を見る、という人が多くても良い。かしこまって見るばかりの展示では、死んだ博物館になってしまう。そのためには、私たちの立場からも出せる知恵は出し、アイデアをひねり出さねばならない。

文化事業と地域の経済、これをどう切り結ぶか。私は文化の活用を「経済」から論じる立場にはない。だが、文化を通した街興し、それにより精神的に活性化した地域の魅力を、尾鷲の真の魅力を、外から来た人が気付くことは歓迎したい。観光業にしてもエコツーリズムは可能性のある分野かもしれない。スローライフ・スローフード運動は特に都会で関心を集めており、田舎生活に憧れを持つ都会人も目立つ。尾鷲がその本質を変えないまま、こうした人たちを迎えるようであって欲しい。

私たち歴史を学ぶ者は、現在の経済には疎く、その方策を語ることは苦手である。専門でもない分野に口を挟むのは慎むべきなのかもしれない。だが学術調査や研究だけで許される状況ではないことも確かである。こうした問題を考えることも、私たちの学問の社会における価値が試される、小さな、しかし大事な機会なのかもしれない。この問題は、まだ私自身に方向性が見えていない。これからじっくり考えていくこととしたい。

新年度から尾鷲市の御支援により、三重大との間で「連携融合事業」という企画が３か年の予定で始まる。２年後には熊野古道センターがオープンする予定で、それまでに基礎的調査が進むであろう。これらが一段落する３年後に、どのような成果を生み出せているであろうか。その頃に改めて、良い報告をしたい、と思う。

（つかもと　あきら　三重大学人文学部）